第三章　内大臣家の物語　夕霧と雲居雁の物語

［第一段　内大臣家の近況］

内の大臣は、この御いそぎを（この明石姫の入内ご準備を）、人の上にて聞きたまふも（他家の事としてお聞きなさるものの）、いみじう心もとなく（二姫が処女でなく入内資格の無いことが非常に不本意で）、さうざうしと思す（寂しいことと御思い為さいます）。

*姫君の御ありさま（姫君の御姿は）、盛りにととのひて（二十歳の今を盛りと成長し）、*あたらしううつくしげなり（このまま家に籠もって埋もれるには惜しいほど美しい）。　*注に＜雲居雁、二十歳。＞とある。　*「あたらし」は「新し（新しい、新たに変わった）」ではなく、「惜し（惜しい、もったいない、能力が発揮出来ずに残念だ）」。

つれづれとうちしめりたまへるほど（しかし父大臣に源中将との結婚を反対されて、何の手立てもなく気落ちして暮らしていらっしゃる姫の様子が）、いみじき御嘆きぐさなるに（大臣自身にとっても大変な心配の種だったが）、かの人の御けしき（源氏中将の御態度は）、はた（一方では）、同じやうになだらかなれば（結婚話が途絶えたままでも焦りも見せず、相変わらずのんびりとしていたので）、「心弱く進み寄らむも（気弱になってこちらから復縁を持ち掛けるのも）、人笑はれに（体裁が悪く）、人のねむごろなりしきざみに（相手が言い寄って来ていた時に）、なびきなましかば（応じていたなら）」など、人知れず思し嘆きて（人知れず悩みなさって）、一方に罪をもおほせたまはず（元々悪縁でも無いものを弘徽殿女御の立后を逸したことの悔しさに邪魔立てしたことを今さらながらに反省して、相手の源中将だけに罪を負わすこともお出来に為れません）。

かくすこしたわみたまへる御けしきを（このように少し内大臣が穏やかに成って来ていらっしゃる御様子を）、宰相の君は聞きたまへど（源中将は弁少将などから聞き及びなさるが）、しばし辛かりし御心を憂しと思へば（ひところの無慈悲な内大臣の御反対を根に持って）、つれなくもてなし（知らん顔をして）、しづめて（平静を保ち）、さすがに（左は然り乍ら）他ざまの心はつくべくもおぼえず（他の女と結婚する決心も付かず）、心づから*戯れにくき折多かれど（本心では駆け引きをする余裕も無いほど姫を恋しく思う時は多かったが）、「*浅緑」聞こえごちし御乳母どもに（六年前の姫が大臣邸に移る時に、六位蔵人と源氏君を見くびって聞こえよがしに御託を並べた姫付きの乳母たちに）、納言に昇りて見えむの御心深かるべし（参議の議長たる納言に出世して見返してやろうという反発心が深かったようです）。　*「たはぶれにくき」は注に＜「ありぬやと　こころみがてら　あひ見ねば　たはぶれにくき　までぞ恋しき」（古今集俳諧歌、一〇二五、読人しらず）＞と参照歌の指摘がある。「ありぬやと」が＜在り得るだろうかと＞という言い方なのが分かり難いだけで、後はほぼ現代語に近い＜試しに少し会わないでいたら、そんな悠長な試みが有り得ないほど恋しさが募った＞という歌だ。だから、「戯れにくき」は＜内大臣と駆け引きなどしていられない＞ということなのだろう。　*「浅緑」は注に＜浅緑の袍は六位の装束。＞とある。六位は、本来は五位以上で殿中入りが許される御所にあって、雑用係の蔵人に限って殿上が許されるという、雲上世界にあっては最下層の身分、らしい。「聞こえごつ」は＜聞こえるように言う＞と古語辞典にあるが、「ごつ」の語感がもうひとつ分かり難い。この「御乳母ども」は藤原姫付きの乳母たちで、もう六年前になる少女巻第五章第五段での、姫がいよいよ大宮邸から大臣邸に連れ移される間際の、当時の源氏学生君の乳母（恐らくは藤原殿の叔

母筋)の計らいで大宮から許された源氏君と姫君との最後の逢瀬の場面で、姫を探しに来ては寄り添う二人を見付けて<「めでたくとも(若君は優れていても)、もののはじめの六位宿世よ(姫の初婚の相手が六位という御縁とは)」と、つぶやくもほの聞こゆ(つぶやくのが二人にかすかに聞こえる)。ただこの屏風のうしろに尋ね来て(乳母は二人が身を寄せる屏風のすぐ後ろに遣って来て)、嘆くなりけり(そう嘆いたのです)。>と描写されていた者たちだ。ということは、この場面に即して言う限りは、「聞こえごつ」は<聞こえよがしに言い放つ>という意味になりそうで、「ごつ」は<わざとしでかす←見くびる←偉ぶる←御託を並べる>ような感じだ。

[第二段　源氏、夕霧に結婚の教訓]

大臣は(源氏殿はそういう御子息を)、「あやしう浮きたるさまかな(何とも腰の落ち着かない状態だな)」と、思し悩みて(懸念なさって)、

「かのわたりのこと(あの藤原姫のことを)、思ひ絶えにたらば(思い絶ったならば)、右大臣(みぎのおとど)、中務宮(なかつかさのみや)などの(などが)、けしきばみ言はせたまふめるを(御息女と其方との縁組の意向を示し仰っていらっしゃるので)、いづくも思ひ定められよ(どちらなりとも結婚を決心なさい)」

とのたまへど(と仰るが)、ものも聞こえたまはず(中将君は何もお応えなさらず)、かしこまりたる御さまにてさぶらひたまふ(恐縮した御態度で控えていらっしゃいます)。

「かやうのことは(こうした話は)、*かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば(畏れ多い故父院の御教えでさえ従おうとはしなかった私なので)、*言交ぜま憂けれど(口出ししたくはないのだが)、今思ひあはするには(今にして思い合わせれば)、かの御教へこそ(あの御諭しこそ)、長き例(ながきためし、不滅の真理)にはありけれ(に違い無い)。　*「かしこき御教へ」は注に<故桐壷院の諭をさす。>とある。「故桐壷院の諭」として印象深いのは、今を遡ること 17 年前になる光君 22 歳の春に、朱雀帝即位に伴い新斎宮に六条御息所の姫君が選ばれ、ちょうど其の時分の院主催の音楽会に招かれていたらしい御息所が、姫に同伴して伊勢に下る意向を示したことに付いて、葵巻第一章第一段に故桐壷院が光君を諌めた行があった。長くなるが拙文と共に引用すると、<大将の(だいしゃうの、源氏の君の)御心ばへも(自分への御心遣いも)いと頼もしげなきを(とても頼り無さそうなので)、「幼き御ありさまの(幼い娘の)うしろめたさにことつけて(世話を見る為と言う理由立てで)下りやしなまし(自分も伊勢に下ってしまおうか)」と、かねてより思しけり(六条御息所は予てから御思いに為っていらっしゃいました)。院にも(院に於かれても)、かかることなむと(この六条の意向は)、聞こし召して(お耳になされて、源氏を次のように窘めなされた)、「故宮の(我が亡き弟宮の)いとやむごとなく思し(とても大事に思い)、時めかしたまひしものを(引き立てて居らした妃を)、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが(他の身分の軽いものと同じように遇するのが)、いとほしきこと(先ず心得違いだ)。斎宮をも(斎宮と成った姫宮も)、この御子たちの列になむ思へば(我が子同然とも思うので)、いづかたにつけても(その意味からもくれぐれも)、おろかならざらむこそよからめ(粗略になど扱わぬが良かろうぞ)。心のすさびにまかせて(気の向くままに)、かく好きわざするは(色事の相手で済まそうなどとは)、いと世のもどき負ひぬべきことなり(ひどい世間の非難を負い兼ねないというべきだ)」など、御けしき悪しければ(院の御機嫌が悪いので)、わが御心地にも(源氏自身も)、げにと思ひ知らるれば(尤もな事と思い知って)、かしこまりてさぶらひたまふ(恐縮してお聞きに為る)。「人のため(相手の立場を)、恥ぢがましきことなく(辱める事無く)、いづれをもなだらかにもてなして(どの女にも万遍なく接して)、女の怨みな負ひそ(恨みを買わぬようにせよ)」とのたまはするにも(との院の仰せに)、「けしか

らぬ心のおほけなさを(藤壺との不倫を)聞こし召しつけたらむ時(院がお知りに為ったら)」と(と思うと)、恐ろしければ(源氏は恐ろしくなって)、かしこまりてまかでたまひぬ(身の縮む思いで退出なされた)。＞という次第で、そのように腰の落ち着かない光君を尻目に葵の上は懐妊の悪阻に苦しんでいたと続く語り口は、放蕩者が波乱を引き起こすという定番のお膳立てに似た話運びだった。ただ、この時の故院の話が果たして「長き例」と言えるものかは微妙だが、要は＜遊ぶ以上は周りの人間関係に必ず波風を立てることになるので、相手にした全ての女たちと均等に寝て、謙虚に求めに応じて身を処し続ける覚悟をしろ＞という帝王学なのだろう。私には無縁なので良く分からない世界観だが、ハーレムを作る男は良くこういう言い方をするようには思う。特に、身分の高いのみならず、また故弟宮の奥方であっただけでなく、院主催の音楽会などに欠かせないほど当代きっての文化人と其の高い教養を敬われた六条は粗略に扱うな、というのは単に処世術と言うよりは政治学の範疇かも知れない。　*「言交ぜむ(ことまぜむ)」は＜口を出す、口を挟む＞。「憂し」は＜厭だ、遣りたくない＞。

つれづれとものすれば(長く独身で居ると)、思ふところあるにやと(何か考えがあるのだろうと)、世人も推し量るらむを(初めは世間の人も思うだろうが)、*宿世の引く方にて(多少の縁に引かれて)、*なほなほしきことに*ありありてなびく(平凡な女と結局一緒になるのは)、いと*尻びに(全く尻すぼみで)、人悪ろきことぞや(みっともないことではないのか)。　*「すくせ」は＜宿命。前世からの因縁。＞で＜自分の力では変えられない運命＞だとすれば、「宿世の引く方」は＜あるべき姿＞のようにも見える。が、此処での言い方は「宿世の引く方」に否定的なわけだから、此処の「宿世」は＜袖摺り合うも多少の縁＞のクチで、全ての現世での出会いが運命付けられているとしても、その出会いの中から自分が来世に運命を結ぶ相手を選ぶのは自分の甲斐性だ、という考え方にあって、真剣に自分の人生に向き合わず＜行き掛かりに任せて関係が深まった相手＝行き摺りの女＞と縁を結んでしまう人生は価値が低い、と言っているようだ。が、私が「運命」という語に抱く認識は＜関係が深まってしまう行き掛かりがある人との出会い＞であり、そうしてしまう自分を客観視して其の人生の価値の有無を考えるのは、正に自分にとってこそ意味の有る事なので、その限りに於いて、一つの考え方を提示する意義は世間話として一般的に有用、ということだろうから、此処の源氏殿の「人悪ろきことぞや」は、言い方はともかくも其の発言の意図としては、けして＜みっともないぞ＞という絶対的な価値観の押し付けではなく、あくまでも＜みっともないことなんじゃないか＞という示唆に過ぎない、と取りたい。　*「なほなほし」は「直し(正しい。普通だ。)」を重ねた言い方なので、否定構文にあっては＜正し過ぎる、普通過ぎる → つまらない、面白味の無い、平凡な＞。　*「ありあり」も重ね言葉で、「ありありと」なら＜はっきりと、歴然と＞だが、「ありありて」は＜結局。とどのつまり。＞と大辞泉にある。　*「尻び」の「び」は状態を示す接尾語「ぶ」の連用形中止による形容詞化なのだろう。「しりぶ(後ぶ、おわりになる)」は上二段活用なので連用形は「しりび(後び、おわりになり)」で、その中止法は＜終りに成り、つつある形＝尻窄み＞だろうか。

*いみじう*思ひのぼれど(どんなに気負ってみても)、心にしもかなはず(必ずしも願いが適わず)、限りのあるものから(力が及ばないからといって)、*好き好きしき心つかはるな(その憂さ晴らしに手近な召人などで、好色心を浪費なさるな)。　*「いみじう」は「いみじく」の音便で＜非常に＞だろうが、恐らく実感のこもった言い方で、あまり一般論や仮定話では使わないような気がする。これは以前からの藤原姫との関係に、というより御乳母たちの悪口を見返そうと出世することに、意固地になっている中将を話題にしているのだろう。ただ、中将を大臣家の子息としては不相応なまでの六位という低身分に処遇したのは殿自身であり、中将の「心にしもかなはず」は恵まれ過ぎた境遇では培えないであろう反骨心を持たせようとした殿の意図には適っているのであり、また殿が梅壺中宮を弘徽殿女御を退けて立后させたことが内大臣の反感を買い、それが中将と姫の仲を裂くことにもなったのであり、実は中将の失意の遠因は悉く殿が作って来た、という自覚ないし自責、もしかすると自負、が此処に有るのか、という疑問はある。　*「おもひのぼる」は「おもひあがる(気位を持つ。

高望みする。)」と同様な言葉だろうか。古語辞典には＜「あがる」が一足飛びに高くなる意が強いのに対して、「のぼる」はあるところを経由して線上的に高くなっていく意＞という面白い指摘がある。低い身分から高い身分への出世欲、と解す。　*「好き好きしき心(好色心、情欲)」は、実際に子宝を結実し、それにまつわる恋愛感情や儀式による消費奨励や人間関係の難題解決を通して文化の熟成が期待できるので、その共同体構成員に心身ともに豊かな暮らしをもたらし得る、という集団の統治規律を司るべき権威者である選民にとって、其の共同体の繁栄の根源の力であり尊ぶべきもの、の筈だ。それを「つかはるな(使いなさるな、消費なさるな)」というのは、その＜力を発揮するな＞ではなく＜無駄に浪費するな＞という意味に違いない。ということは、相手の女が政治勢力の拡大が見込めない低い家柄で、その場限りの風情遊びで終わる情事、を指しているのだろう。確かに、男の射精欲は栄養状態が良ければ限りなく再生産される設計になっているようにも見えるが、情欲は相当程度に情緒に左右されそうだ。果たして、動物の生命力は物性が基本であり、社会構造も物性だが、その統率は情緒だろうか。難しいし、概念付けて解決する問題でもなさそうだ。マ、だからこそ、今を生きるヒトがいつでも主人公で居られる、というワケか。ともあれ、内大臣家の近江の君に対する皮肉として見れば、いくらかは具体像も想起しやすいかも知れない。しかしそれでも、ある人の個人的な価値観や満足度とは別に、実勢力の客観的な意味としては、どの駒が如何働くかは状勢次第という物性こそが最も確からしい気もする。いや、余談が過ぎた。

いはけなくより(私は幼い時から)、宮の内に*生ひ出でて(女の園の後宮の中で育ち成人して)、身を心にまかせず(其の刺激の多さに頻発する、勃起の催しを思うように処理できず)、所狭く(かといって、女房たちの目も多くて煩く)、いささかの事のあやまりもあらば(一寸した女の仕種に上気しようものなら)、軽々しきそしりをや負はむと(はしたないとの誹りを受けかねないと)、つつみしだに(欲情を抑えていたが)、なほ好き好きしき咎を負ひて(それでも何人かの女と遊んでは軽々しい好色者と非難されて)、*世にはしたなめられき(悪評を買ったものだ)。　*「おひいづ」は＜生まれ出る＞や＜成長する、育つ＞と古語辞典にあるが、渋谷訳文には＜成人して＞とあり、なるほど話題が「好き好きしき咎(奔放な性処理への非難)」であってみれば、此処の文は精通後の「身」と「心」を述べているので、此処の「生ひ出づ」は＜成人する＞との意を汲むべきだろう。ただ、此処での話題は「宮の内」のことなので、「いささかの事のあやまり」および「好き好きしき咎」は元服後の事だとしても、葵の上の左大臣家や臣籍降下に伴う独立拠点として与えられた二条院での暮らしの話として語られた空蝉や夕顔や御息所のことではなく、例えば末摘花巻の大輔命婦や紅葉賀巻の源典侍のような女官との艶談かと思う。　*「世にはしたなむ」は＜広く悪評を買う＞だが、源氏殿は光君として宮中で誉めそやされていたのであり、弘徽殿女御に毛嫌いされて、其の実家である時の右大臣家筋にやがては冷遇されたものの、桐壺帝在位中は当然に、譲位後も存命中は朱雀朝廷に於いて厚遇されていて、この言い方は一つには謙遜であり、一つには説教に論理性を持たせるために整合された方便だ。

位浅く(位が低くて)、何となき身のほど(責任の無い立場だからといって)、うちとけ(気を緩めて)、心のままなる振る舞ひなどものせらるな(その場限りの思い付きで女遊びなど為されまするな)。心おのづからおごりぬれば(そうした気ままな暮らしを続けて何でも思いのままになるように考えて、気持ちが次第に大きくなると)、思ひしづむべき*くさはひなき時(ふと冷静に実生活を考え直す地道な同伴者たる妻子が無い時は)、女のことにてなむ(女の問題で)、かしこき人(賢人と言われる人も)、昔も乱るる例ありける(昔から道を誤る例があったようだ)。　*「くさはひ」は＜種類＞で、此処では「思ひしづむ」に＜相応しいような人＞で、それは＜地道な同伴者＞なのだろう。注には＜妻子などをさす。＞とある。この行の話は、朱雀院の尚侍君との一件に重なって見える。

*さるまじきことに心をつけて(分不相応な相手に懸想して)、人の名をも立て(相手の名も噂に立てて傷付け)、みづからも恨みを負ふなむ(力不足ゆえに十分な処遇が出来ずに、自分も相手からの恨みを買うとなると)、つひの*ほだしとなりける(生涯の罪となってしまう)。　*「さるまじきこと」は<そうあってはならないこと>で、是が分不相応な恋の相手、とは即ち御息所を念頭に置いての言い方だろうが、を意味するらしい。ぼかすのもいい加減にして欲しいくらい分かり難い表現だ。　*「ほだし」は<手かせ・足かせ>とあり、動くのに<邪魔なもの>ではあるだろうが、此処での意味は<罪人>だろう。

*とりあやまりつつ見む人の(誤ったかと思いつつ連れ添っている相手が)、わが心にかなはず(期待に応え得る才知がなく)、忍ばむこと難き節ありとも(我慢出来ない時があっても)、なほ思ひ返さむ心をならひて(それでも思い直す気持ちを心掛けて)、もしは親の心にゆづり(あるいはその相手の親心に免じて)、もしは親なくて世の中かたほにありとも(あるいは親に死に別れて身寄りがなくても)、人柄心苦しうなどあらむ人をば(人柄が素直で懸命であろう人なら)、それを片かどに寄せても見たまへ(それを取柄と考えて添い続けなさい)。わがため(自分にとっても)、人のため(相手にとっても)、つひによかるべき心ぞ深うあるべき(終わり良ければ全て良しとの考えこそを深く銘じるべきだ)」　*この行の話は、末摘や空蝉のことだろうか。一度付き合ったら最後まで面倒を見る覚悟を持て、というようなことらしい。が、主旨ないし意図が良く分からない訓示だ。大意は訳文や辞書を参照にして辻褄を合わせた心算だが、円満が一番、みたいな当たり障りの無い文意で手応えが無い。何か肝心な事を見逃しているのかも知れない。が、今は分からない。ともあれ、この段は中将への訓示とはいうものの、源氏殿自身による過去の女遍歴に対する一定の評価ではありそうで、作者の源氏の設定や当時の摂関家の考え方の一端を知る意味でも、後で読み返すことがあるかも知れない。

など(などと殿は中将に)、のどやかにつれづれなる折は(懸案もなく業務も暇な時は)、かかる御心づかひをのみ教へたまふ(こうした御結婚観ばかりを近頃は教えなさいます)。

[第三段　夕霧と雲居の雁の仲]

かやうなる御諫めにつきて(このような中将がいつまでも独身で居ることを懸念なさる殿の御忠告に付いて)、戯れにても他ざまの心を思ひかかるは(中将は他の女と遊ぶことはあっても結婚を考えて見たりするのは)、あはれに(あぁとてもそれは出来ないと)、人やりならずおぼえたまふ(姫に責められた訳でもなく、自然にそういう気に成り為さいます)。

女も(姫も女心に)、常よりことに(此処に来て殊に)、大臣の思ひ嘆きたまへる御けしきに(父大臣の自分の身を案じ下さる御姿に)、恥づかしう(気が引けて)、憂き身と思し沈めど(厄介な事情にある我が身の将来を暗く思いなさるが)、上はつれなくおほどかにて(表面上はさりげなくおっとりと構えて)、眺め過ぐしたまふ(様子見で暮らしていらっしゃいます)。

御文は(源氏君からのお手紙は)、思ひあまりたまふ折々(姫への懐かしさが込上げなさった時ごとに)、あはれに心深きさまに聞こえたまふ(実感した心情のままに書いて来ていらっしゃいます)。「*誰がまことをか(この人以外に頼る人もない)」と思ひながら(と姫も思うので)、世馴れたる人こそ(古女房なら)、あながちに人の心をも疑ふなれ(最初から男の真心を疑って掛かるだろうが)、あはれと見たまふふし多かり(中将の文面には感慨深くお読みになる箇所が多くありま

した)。　*「たがまことをか」は＜この人の他に、誰の誠意を信じれば良いのか(他に頼れる人も無し)＞という言い方だろう。注には＜偽りと思ふものから今さらに誰が真をか我は頼まむ（古今集恋四、七一三、読人しらず）＞を参照歌に指摘してある。まるで古女房が浮気亭主のつなぎ文を読んだ感想のような歌だが、なるほど「世馴れたる人」らしい詠み方だ。

「中務宮なむ(中務宮ですが)、大殿にも御けしき賜はりて(源氏殿にも宮姫と若君との婚儀に御内意を頂いて)、さもやと(話を進めようかと)、思し交はしたなる(同意なさったようです)」

と人の聞こえければ(と女房が噂話を申し上げたので)、大臣は(藤原殿は)、ひき返し御胸ふたがるべし(改めて御気が重く成ったのでしょう)。忍びて(静かに)、

「さることをこそ聞きしか(こういう話を聞きました)。情けなき人の御心にもありけるかな(若君も薄情な御心だったのかな)。大臣の(源氏殿が)、口入れたまひしに(口添えなさった時に)、*執念かりきとて(私が執念深く二人の結婚を拒んだので)、引き違へたまふなるべし(別の方途を取り為さったらしい)。心弱くなびきても(弱気になって言われた通りにしていても)、*人笑へならましこと(体裁の悪い負けざまを曝しかねなかったし)」　*「執念かる(しふねかる)」は、名詞「執念(執着心)」に進行表示の接尾語「かる」が付いたもので＜執念付く＝こだわって意固地になる＞という意味、なのだろう。*「ひとわらへ」は注に＜『完訳』は「源氏におもねる不面目。内大臣はこれまでも「人笑へ」を頻発。権門特有の家の恥の意識である」と注す。＞とある。確かに、姫の入内機会を逸したことは権門家にとって大問題ではあるだろうが、この姫は何も后がねとして育てて来ていた訳ではなかった。源氏君は太政大臣家の御子息であり、本来は望ましい結婚相手の一人のはずだ。ただ、それでも場合によっては入内も視野に入れてはいたので、幼少から一緒に育った源氏君とは十歳過ぎから別々に引き離して育てさせた。そして弘徽殿女御の立后に失敗する事態となって、残された唯一の手駒であるこの姫の入内を考える場合となったが、既に二人が姦通していて妃としての入内機会も阻まれた。女御の立后も姫の入内も悉く源氏家に阻まれるという構図が内大臣には許せなかったのだろう。是が摂関家を維持すべき藤原家にとって由々しき事態である事は間違い無い。だから「人笑へ」が＜世間の嘲笑＞であり其れを権門家として避ける為なら、源氏君と姫との＜姦通を未然に防ぐ手立て＞は必要だったのだろう。が、既に通じてしまった仲を裂くことが＜「人笑へならまし」を避ける事になる＞としたら、その意味は＜一矢報いる＞ことだけだから、この「人笑へ」は＜源氏殿の高笑い＝藤原殿の敗北＞という、内大臣にとってより個人的な確執の度合いが強い言い方、のようだ。

など、涙を浮けてのたまへば(涙を浮かべて仰ると)、姫君、いと恥づかしきにも(姫君はとても気が引ける中にも)、そこはかとなく涙のこぼるれば(悲しい気がして涙がこぼれれば)、はしたなくて背きたまへる(決まりが悪くて顔を背けなさいます)、らうたげさ限りなし(純真さがこの上ありません)。

「いかにせまし(如何したら良いだろう)。なほや進み出でて(やはり此方から申し出て)、*けしきをとらまし(様子を探って見るか)」　*「けしきをとる」は「けしきどる(気色取る、様子を探る)」と同義語、だろう。

など、思し乱れて立ちたまひぬる名残も(思いも定まらぬまま立ち去りなさった父君の残り香の中で)、やがて端近う眺めたまふ(姫はそのまま縁側によって庭を眺めなさいます)。

「あやしく(何故か)、*心おくれても進み出でつる涙かな(抑え切れずに出てしまった涙だった)。いかに思しつらむ(父君は如何お思いになっただろうか)」　*「こころおくる」は「心後る」と表記され＜気後れする＞と大辞泉にある。「気後れする」は＜気が引ける＝遠慮しようと思う＝堪えようとする＞で、「心おくれても」は＜堪えようとしても、抑えようとしても＞。

など、よろづに思ひゐたまへるほどに(姫がいろいろと考え込んでいらっしゃる所に)、御文あり(源氏君からの御文がありました)。さすがにぞ見たまふ(早速気になって御覧になります)。こまやかにて(情熱的な文があって)、

「つれなさは憂き世の常になりゆくを、忘れぬ人や人にことなる」(和歌 32-10)

「暗い浮世のこの裏町を、覗く冷たいこぼれ陽よ」(意訳 32-10)

*まなざしを思い出すやら、柔肌が恋しいやらの情熱的な言葉は本文に記して、歌は軽妙さを狙ったか。ちょっとした自虐ネタの趣き。「忘れぬ人」は＜あなたを忘れない私＞で、「人に異なる」は＜世間の人と違う私＞で、「人」が「人」では無いという言葉遊びと、「世の常」である＜世間の「人」＞とは違う「人」が自分だという疎外感に寂しさを漂わす、のだろうか。理屈は然して面白くないので、この字面の音韻で何かを感じ取るしかなさそうだ。

とあり(と歌がありました)。「けしきばかりもかすめぬ(他の縁談話がある事を、その気配さえも洩らさない)、つれなさよ(よそよそしさだ)」と(と姫は)、思ひ続けたまふは憂けれど(中将への疑いを考え続けなさるのは辛かったが)、

「限りとて忘れがたきを忘るるも、こや世になびく心なるらむ」(和歌 32-11)

「忘れぬ人と言うものの、覚えることを忘れてる」(意訳 32-11)

*この贈答は歌なのだろうか。川柳と言うか、短歌の語数で理屈を並べただけ、みたいな印象だ。いや、それでも含蓄のある見事な言い回しなら銘言にも成り得るには違いない。しかし、中将が目も呉れていない艶談話を、姫は話が進んでいると誤解しての返事だから、含蓄も何も、中将には自分が「忘れぬ」と詠んだ歌に対して、姫が「忘れがたきを忘るる」と否定して来る意味が分からない。この返歌の前文には＜どうせ今進んでいる中務宮家との縁談話がまとまれば＞と書くべきだが、そんな不愉快なことを姫が口に出来る筈も無い。斯くして「こや世になびく心なるらむ」を、中将の言う「人にことなる」への痛烈な皮肉の心算で詠んだ姫の意図は中将には伝わらず、単に意味不明の文言が並んでいるだけとなる。それが以下に記される。

とあるを(と返歌があるのを)、「あやし(変な返歌だな)」と(と中将は)、うち置かれず(手離すことも出来ず)、傾きつつ見ゐたまへり(首を傾けながら見据えていらっしゃいました)。

(2011 年 10 月 5 日、読了)